

ちょっと変わった経験 —細々40年女医からの一言—

小樽市医師会
恵愛病院

吉田 容子

精神科医療に細々と携わって約40年が過ぎた。振り返ると大学在学中に結婚、卒業前々日に長女を出産、1歳8ヵ月で入局、3年間の研修中に、長男を出産、二女を妊娠、2つ目の研修病院は出産＝退職というとんでもない就業規則だったので当然辞めた。

その後、子育て環境を考え、縁あって高校教師だった夫と6歳、3歳、8ヵ月の子を連れ、三重県の山あいの小さな町の丘にある日本で唯一の私立全寮制農業高校（愛農学園農業高等学校、生徒約100名）に夫は国語教師、私は養護教諭として赴任し、6年間を過ごした。そこは「愛農が丘」と呼ばれ、約2haの敷地に校舎、校庭、男子寮、女子寮、食堂兼講堂、畑、果樹林、鶏舎、牛舎、豚舎、牧草地（離れたところに水田）があり、その中にオンボロの職員住宅が10軒ほどあった。有機農法をしていたので、蚊、ハエはもちろん、虫、鳥、蛇など多様な生き物が共存しており本当に自然豊かで、農耕機やたまに通る職員の車や牛乳運搬用トラックの音以外は牛、鶏、虫や鳥の鳴き声など自然の音が一杯だった。丘に住んでいる職員の子供たちは中学生以下20人ほどおり、土や生き物に触れながら敷地内を自由に遊び回った。子供集団の中でいじめもあったけれど、高校生たち、大人たちを含め、多様な人間関係の中で、目には見えないけれど、都会では学べない多くの体験をさせてもらい育った。現在38歳になる長男は「今の自分を作った基礎は愛農で育ったこと」と言ってくれている。私は月1万円の給料で自宅が保健室だった。その他寮母、子供会、それに丘の生活上のさまざまな役割分担と話し合い、また高校生・職員間の問題など毎日が本当に大変だったけれど、それらの経験を通して人として成長させてもらい、かけがえない貴重な日々だった。後半の2年は三重県の国立津病院の外来など細々診療を続けた。

札幌に帰ってから、単科の精神科病院で働くことになり、院長が「長く働いてほしいので、子供の小さい間は週3日で」と仰ってくださり、その間PTAの仕事もした。2年ほどで院長が病気になったため、フルタイムとなり、たちまち仕事は恐ろしく忙しくなった。その後院長が亡くなり、しばらくして私は燃え尽き、辞める羽目になった。1年ほど休み、他の病院に勤めたがやはり忙しく、親の看取り、子供3人の同時進学、思春期、自分の更年期など重なり、フルで働くことは難しくなり、半日勤務にして貰ったが、その年度で辞めることが条件だっ

た。その後、今の職場に移って約17年。この間子供たちは皆独立し、結婚、出産、孫も5人となった。今の職場は女性医師が多く、ワークシェアなど働きやすい環境で細々臨床を続けさせて貰っている。

この間、精神科をとりまく環境も40年前とは様変わりし、病名も診断基準も変わり、外来中心となり、新薬が次々開発され、科学技術の進歩による新しい知見や治療法も出てきた。また昔の典型的な精神疾患の患者さんは減ったように感じられる。他方、現在の世相や社会のありかたを反映した患者さんが増え、薬や精神療法などでは何ともならないもどかしさを感じている。日々の臨床場面で自身の力量不足を感じつつ患者さんから学ばせてもらっている。しかし、結局のところ診療の基本は変わらないような気がしている。恩師の故山下格先生に学んだ「患者さんが安心して話せる雰囲気を作り、患者さんの話を良く聴く」ということである。特に精神科の患者さんは孤独で弱い立場の方が多い。自分の態度、表情、声の出し方、トーンを含め、言葉の選び方一つもとても大切で、それらによって患者さんの態度、表情、話の内容も変わり、診断も治療的關係も変わってくるのである。自身の人間性が問われる職業と感じている。また、私が女性であるため、女性の患者さんが多く、男性医師に話せない内容やまた他科に関する質問も多い。「男の先生は怖くて言えない、聞けない」「パソコンばかり見てこちらを見てくれない」という患者さんもいる。

そんな中で年を重ねるにつれ、患者さんの置かれている心理的・身体的そして生活背景などがより実感として想像でき、共感し、具体的なアドバイスがよりしやすくなってきた。それは一人の人間として挫折を含めたさまざまな人生経験をしてきたこと、女性であること、年を取ることが臨床に役立っているということではないかと思っている。

40年を振り返って今思うことは、自身の経験から女性医師をとりまく環境がより良くなれば、もっと女性医師も活躍でき、患者さんにとってもより良い医療が提供できるのではないかとつくづく思う。なにせ世の中の半数以上が女性なのだから。また最新の高度医療も大切だけれども、どの科にしても医療は血の通った人と人の関係で成り立つもので、そうでなければマニュアル診療、診断、治療は、そのうちAIとロボットに取って代われ、医者のお大半は不要の時代が来るのではないかと危惧している。